佐久間俊彦教育経営部長

ばならないわけですが、効果を上げるための基本として特に重視したいポイントをお聞かせいただきたいと思います。

初めに網代先生、よろしくお願いします。

網　代　5点にまとめたいと思います。

第一は、各学校の実態に応じ、改善を図ること。校内研修に絶対的な定形はありません。

第二は、個々の職員が主体的に関われるよう工夫すること。研修の進展や成果に喜びを感じ、変わり行く自分に生きがい感を得るように。

第三に、職員の個性的な立場や願いを生かすこと。先に述べたように、学校の立場との同調を図り、相乗的効果を高めて職場に切磋琢磨の気風を啓培したいのです。

第四は、研究の成果の吟味と定着を広い立場から行い効果をいっそう高めること。主題の追究が教育課題解決の道ならば、その対象は当初は特定の教科ではあっても、実践・適応の場は全教科・領域へ当然拡大されるべきでしょう。

第五は、研究実践の日常化を図ること、日々刻々すべてが研修で、特設された校内研修の時間だけが研修でないことを銘記したいのです。

松　崎　わたしの学校で実践していることのいくつかをお話させていただきます。

一つは、先生方のニーズに応ずる組織の工夫です。先生方の研究意欲を大切にし、“好きな教科で研究しましょう”と呼びかけ、8つのサークルで研究を始めました。。

二つ目は、主題設定の視点を子供たちに置き、子供たちにもわかるやさしい研究主題にしたことです。さらに、各サークルごとに具体的なサブテーマを設けて研究に当たっています。

三つ目として時間的な問題ですが、毎週火曜日を研修日として年間計画を立て、きちんと実施するようにしています。実施できない時は、別の日や時間に必ず設定するようにしています。

また、時間不足を補うために、研修主任が「研修だより」やプリントを配布して、共通理解を図っています。

四つ目は、各サークルに1名ずつコーチ（指導者）をお願いし、「専任コーチ制」をとってサークルの研究が主体的に進められるよう配慮しています。

お陰で研修に対する活気が盛り上がり、好きな教科の研究に意欲的に立ち向かう先生方の姿が見られ、うれしく思っています。

水　野　高等学校の場合は、教科の専門性がややもすると垣根になる場合があります。ですから、これを低くしてお互いに乗り入れやすくすることが第一のポイントかと思います。

また、各学校が直面している課題は何かを浮き彫りにすることも大切なポイントではないでしょうか。

さらに、多くの教員に対して失敗を恐れずにチャレンジできるチャンスを与え、ベテラン教師を中心として、お互いがそれをフォローする体制を整えることもまた大事なことだと思います。

生徒一人一人を高めるには、何といっても教